

ブラジル産業・風俗小誌

伯国みたまま、きいたまま

進藤 賢一

(1) はじめに

一国の産業・風俗誌を書くことになれば、ぼう大な内容を網羅し、詳細かつ克明な地誌としなければいけないのだが、ここでは、そんな大袈裟なことを言おうとしているのではない。

見聞録風な旅行記に、若干のデータを含めて、「私のみたブラジル」の印象を、私の判断と解釈で記そうと試みたまでである。

「サンバとコーヒーの国」ブラジルは、何回出向いても、新鮮で、ユニークなイメージを与えてくれる。多くのブラジル訪問者がこの国のファンになるのも無理はない、と思う。

サンバのリズムは、毎年、真夏の二月中旬四日間ほどブツ通しで開かれるカーニバル（カルナバル）で披露されるが、これは日本でよく聴くボサノバ調とは、ひと味違った強烈なビートである。この曲にのってのカーニバルは、くねくねした踊りと共に進行するが、毎年新しく生れた曲が、これに使われる。一年がかりで準備した、いろんなチームの踊り方と衣装が、暑い夜を吹き飛ばすように、観客の前に登場し、数万人の観客も一緒に踊る。南国の愉快で、快活な人々の心や、気持が表現されているように思うのである。

全伯の各都市、農村部までカーニバル休暇となり、同じようなリズムで、踊りが繰り広げられるところに、一種の国民的統一がみえるよ

うにも考えられるが、内実は、とてもそんなものではない。

ブラジルといえば、コーヒー生産高、輸出高とも世界一と折紙がついている。ブラジルのどこにでも栽培されている嗜好作物だと思いがちであるが決してそんなことはない。サンパウロ州やパラナ州など限られた地域に偏在している。だが近年は、そうした産地が、ミナス・ゼライス州やゴヤス州方面に移動していることも面白い。旧産地はより、生産性の高い農作物にとつて変っているのだ。

ブラジルで、企業、会社、商店、旅行代理店、学校を訪問すると、必ずといってよいほどコーヒーが差し出される。日本で茶を出す習慣に似ている。とても小さなコーヒーカップに、恐ろしく濃度の高いコーヒー、というのが共通した特徴。行く先々で、こんなものばかり飲まされたのでは、頭がグラグラしてしまう。地主農家（ファゼンデイロ）をまわれば、わざわざ小作人や農業労働者の家で、みている前で炒煎したばかりのコーヒーを振舞ってくれるところがある。

小作農家の年寄りなどには熟る技術の優れた人々がいるのであろう。コーヒー栽培は今日でも、最も手のかかる収穫労働であるが機械化されていない。正確には収穫機械は開発されているのであるが、低賃金労働力の存在が、機械化を阻んでいる、ともいえる。

「サンバとコーヒー」は、「タンゴのアルゼンチン」同様、ブラジルの風俗・文化を特徴づけているものだ。

この小稿では、ブラジルで出合った多くの人々と話し、聞き出したこと、商社や企業まで聞きとりをしてメモしたことがらを、読み易くまとめて、産業・風俗誌としたまでである。

(2) ブラキチになるわけ

「ブラキチ」なる言葉が定着している。言うまでもなくブラジル・キチガイの略だが、北海道海外協会や国際協力事業団が催す、各種の会合には、このブラキチどもが集って、話題を盛りあげる。スライド映写会などしようものなら、フロアからの意見や質問、画像についての説明が、どこからでも飛び出してきて、お客が集っている、という雰囲気ではない。各人が問題提起者であり、説明者だ。

ブラキチになる条件は、ブラジルを訪れた経験があることとよい。ブラジルの国語はポルトガル語、現地でポー語と呼ぶが、この言葉を知っている必要は必ずしもない。日本語で十分なのだ。それほどブラジルには日系人がいる。多くのブラキチは、ブラジルで日系人にお世話になり、日系人を通してブラジル社会を理解できるのである。

日系人が多い、といったところで、入植移民がはじまってわずか八〇年、二、三世も含め百二〇万人に満たない。ブラジルの人口が一、四億人だから、人口比で一％もないのである。しかし、サンパウロ市（七百万人）の地下鉄リベルダーデの駅で降りて地上にでると、そこは日本にいる錯覚がおこるような日本人街がある。リベルダーデ通りの陸橋は「大阪橋」と表示しており、日系人の経営するホテルや商店、食堂やレストラン、カラオケバーやスナックが林立していて、看板も日本語表示になっているところが多い。日本庭園があり、日系人経営の旅行代理店もある。たくさんの日本人・日系人が歩いているし、日本語が飛びかっている。

ロスアンゼルスやサンフランシスコ、ニューヨークにも日系人の比較的多く住んでいる地区があるが、サンパウロはそれらの比ではない。

いくつもの通りに、提燈型街燈が林立している。

誰もが、はじめて、このリベルダーデに入りこんでくると、「これは日本だ」と思うであろう。

そのほかに、日系人の比較的多い町はある。パラナ州のロンドリナ、アサイ、ウライがそうだ。ロンドリナ大学は学生数一、一万人、教員数千四百人であるが、教員数の一〇％は日系人だという。

大学の窓口で、知人の教授を探してもらうのに、事務員の一人に、英語で話しかけたら、英語はわからない、という素振りをし、「日本語ならできます」というのだ。これほど便利なことはない。



2月中旬ブラジルは全土がカーニバルで賑う、
日系人主催のカーニバル風景
(ロンドリナ、ACEL)

ロンドリナ市は人口四〇万人の新しい町で、イギリス人が開墾したことで、小さなロンドンの意から命名した、といわれている。日系人向けの体育館やテニスコートなど総合文化、運動施設も整っており、カーニバル時など四百〜五百人の人々（日系人）で溢れてしまう。ACELなる施設だ。

日系人だから、日本語がわかる、話せる、というわけにはいかない。一世の人々が少しづつこの世を去り、二〜三世が急増しているからだ。一世は、勿論日本語は堪能だが、二世になると、聞く、話すはできても、読む、書くはできない人々の比率が増す。余程、家庭か、日本語学校などで、その気になって勉強させたり、教えないと、「読み書き」は習得できない。三世になると「日本語とは、おさらば」、の感が一般と強くなり、話も通じない世代だ。

パラナ州ウライ市のタムラ市長が、隣りのアサイ市は日本語教育が盛んで、日本語のできる二世、三世が多く、日本への留学がたやすく実現するが、ウライ市には、そうした環境がない。日本語の喋れない子供達が増え、留学もおぼつかない」とこぼしていた。

アサイ市は、札大出身の菊田由美子さんを日本語教師に迎えて、大そう重宝がられていたが、彼女は父親の死去に伴い、帰国してしまつて、現地では悲愴感が漂っていた。

日本語教育は、今、ブラジル人にとって最大の関心事であり、課題なのである。

二〜三世の世代が、日本語に疎くなつてきているのは、ブラジル社会への同化を意味し、結構なことではあるが、一世の人々はさびしい思いをしている。

日本語離れに拍車をかけているのは、特に三世世代の・現地人（ポルトガル系白人など）との結婚が急増していることよつてである。

ファゼンデイロといわれる大地主の息子が、コロノといわれる労働者の娘と結婚する。彼女達は、勞せずして下層民から、上層クラスの仲間入りが出来るからだ、と説明した一世の人々がいた。

一世世代が嫌がるのは、白人女性の中でも労働者の家庭に育つた子供は、マナーが悪く、礼儀作法を知らない、とか、日本人女性のようなこまやかな行動・思考様式を持ち合わせていないとか、である。

ロンドリナに住んでいる日系の女性弁護士に「某日系二世の大学教

授は、日本にきて、全国各地の仲間や友人、大学関係者にお世話になりながら、礼状をもらった人がいない」といったら、「彼女はもうブラジル人なのよ」との返事だ。彼女の主人は、白人だと聞いているが、礼状は書かなくても、ロンドリナを訪れるたびに、親切に案内や対応してくれることは常だ。

このロンドリナ大教授に「何故、礼状を書かないのですか」、と聞いたことがある。曰く、「私は、日本語が書けないし、英語で書いたりすると誤解されても困るから」のこと。

合点はいかないが、そう返答された。

しかし、ブラジル日系人の親切さは、度を超えている、と思う。これは、日系人に限らずブラジルの風土なのかもしれない。

パラナ州のロンドリナ空港におりたつと、いつも一〇人程度、あるいはそれ以上の人々が出迎える。知らない人々が圧倒的に多いのだが、そのあとは車に分譲して、市内のレストランにいき、歓迎レセプションを開いてくれる。その後も、毎日のようにいろんなパーティーを催したり、希望する土地を案内したりしてくれるのだ。

こんな親切さに甘えていたら、誰だつてブラキチになつてしまふ。日系人の親切さは、日本で喰いはぐれ、渡伯してひと旗あげようとして成功したから、その勇姿をみてほしい、といった傲りからではない。根っからというか、腹の底から人を思う心が積みあげられている。

ロンドリナ大のN教授と、地理学の大学院生一人をのせて、パラナ州のなかほどにあるマリンガ（ドイツ人開植の街）にいったことがある。

帰りが遅くなつて、夜中の二時、午前二時に、果てしなく続く農地帯の真只中で、車が故障した。

ようやく通りかかった車を停めると、近くの街の修理屋まで索引してくれ、修理屋を叩きおこして、その運転手は「じゃ」といつて帰つていった。寝ばけ眼で起きてきた修理屋は何やら三〇分ほど修理に時

間をかけ、車を動く状態にした。『お金はいくら?』と聞いたら『こんな真夜中に大変だろう、知らないよ』といった意味のことを言って、戸を閉めた。

たった、これだけの経験だが、ブラジル人は知らない人に、実に親切である。これは、日本とは違う、その違いをみせつけられた感じであった。

すべてが、この調子であるから、『やっぱりブラジルはいいよ』という日本人旅行者が多く、やがてブラキチになっていく。

(3) 違和感のない食事

ブラジルの食事は、日本人の嗜好によく合う、と思う。米を煮て食べる習慣は、ブラジルだけでなく、東南アジア諸国で普通にみられるものだ。

米を煮て食べる民族は、炊きめしに、味をつけることはあまりしない。インディカ米（長粒米）の調理は、油などで炒めたり、熬りつけるが、この場合は調味料や具を入れることが多いように思われる。味つけご飯に、香料を使う地域もあるが、これは日本人に不むき。

東南アジア諸地域、例えば南中国や香港などでは、白飯に味付けがほどこされていなくても、副食品には、強烈な匂いが添加されているものが多く、酒でおかずを流しこまないと喉を通らないものすらある。

それに広東料理などは犬、蛙、蜂、蜥蜴（トカゲ）、飛蝗（バッタ）、蛇などの素材を使う、中には食用鼠（ねずみ）もあると聞いた。こうした素材がわかれば、日本人の喉では通りにくいし、加えて、異様な匂いがたちこめている料理は不快感すらするものだ。

ブラジルにもフェジョアードという、かつては奴隷の食事だった、というものが、今はれっきとした高級(?)料理の装いで登場する。

これはフェイジョン豆の煮たものに野菜や肉を混ぜたものだが、豚の耳と鼻が入っていることを特徴とする。『豚の耳や鼻はいや』、との



アプカラナの牛の放牧・ブラジルに多いやせた感じのネローレ種が放牧されている

反発もあろうが、この食事のよいところは、特有の香料を使っていないことだ。フェジョアードはレストランにもおいてあるが、家庭料理としても簡単につくれるので、パーティでよく食べさせられる。

パーティというのも、欧米や南米では、家庭に人を呼んで催すケースを言っていることが多い。

フェジョアードによく合う酒にカイピリンヤがある。これは、ブラジル産のさとうきびからつくる焼酎ピンガに、ライム、砂糖など混ぜた一種のカクテル。

ブラジルの人々は、このカイピリンヤをこよなく愛し、又よく呑む。地酒が好きなのである。

日本酒を呑みたければ、少々日本と比べて高価だが、現地産の『東麒麟』の清酒がある。この名柄は、サンパウロから西北に一三〇kmほどのところにカンピーナス市（人口七〇万人位）郊外にあるファゼンダ、『三菱東山農場』で製造されている。この東山農場の頭文字と、三菱系キンビールにちなんだものらしい。

ブラジル産の米は、ほとんどが陸稲で、あまり味がよくないが、南部のサンタカタリーナ州やリオグランデ・ド・スル州での水稲はうまいと聞く。うまい酒は、うまい米が要求されるが、飲んでみて違和感はない。

ブラジルの食を特徴づけているものにシラスカリア、という焼肉がある。シラスコともいい、道路を車で走っているとよく眼につく看板だ。

日本でいう「ジンギスカンの食べ放題」を、牛肉に置きかえた、と思えばよい。

刀のような串に牛肉の塊（時に鶏、豚も使う）を棘し、炭火で焼いて、焼きたてのものを各席の客の皿のうえに、ナイフで切り落としておいていく。

唯、味はというと、日本産の牛肉のような好品質ではない。ブラジル、アルゼンチンなど南半球の国々の牛肉は、赤味が多く硬いので、約七〇万トンを南半球から輸入しているアメリカ合衆国では、ほとんどミンチ肉として利用しているほどである。品質の違いがあり、米国産と競合しないのだ。

理由は繁殖（子取り）↓育成↓肥育の全過程のエサが、ほとんど草で賄われているからである。日本のように全過程を穀物飼料で給餌すれば、霜降り、サシ入り、脂肪交雑肉ができあがるのだが、ブラジルは、アルゼンチン同様粗放的に飼育している。

味は少々落ちるとはいえ、牛焼肉を腹一杯食べて千円程度なのはこたえられない安さだ。

一〇年ほど前は、食べ残したり、冷てしまった肉はバケツに捨てて、新焼肉を置いていったものだが、最近、そんな無駄なことはしない。注文に応じた、客の要望による分量しか置いていかないのである。

シラスコは、レストランだけであるものでない。

一戸建ての家で、プールサイドに、シラスコ用パーティ場を建築し

ている日系人もいた。

炭火焼の炉があつて二〇人位でシラスコパーティが出来る「離れ」である。

熱帯、亜熱帯気候の卓越するブラジルでは、屋根さえあれば一年中戸外でパーティができる環境があるのだ。

ブラジルで不足している食べ物は、海産物である。サントスやリオデジャネイロ、サルバドールやレシフェ、ベレンなど海岸や河川沿いの街のメルカードには、えび、カニ、魚類をみるのだが、レストランでメニューに組みこんでいるところを探すのは、やや骨が折れる。

サントスの海岸べりのホテルで聴いた、海産物料理屋に車を走らせ、焼エビをおかずにピンガを呑んだことがある。値段を請求されて驚いた。とてつもなく高い。「高すぎる」と詰めよると「半値でいい」という、半値でも高いから支払う意志がない、警察でも、誰でも呼べ」といったら、さらに安くした。人をみて値段を決めているのである。

この手の商人に出会うと、ブラジルの印象も悪くなるのだが、逆の見方をすれば、貧富の差は歴然、「金持ちから、ふんだくるのは悪いことではない」との心構へが一般化しているブラジルでは、やむを得ないかもしれない。

(4) 伯国産業と日系人

サンパウロ市のパウリスタ通りは、この国のウォール街というか、ビジネスセンターを形造っている。

そのビルの一角にジェトロ（日本貿易振興会）のサンパウロ支所がある。支所の和気氏にお会いしたのは'88年二月一二日であった。

以下、彼の話などを混じえ、他の人々の聞きとりを含めてブラジル経済をみていきたい。

二月中旬は、ブラジルのどの都市でも、カーニバルが行われていて、国内を移動する公共交通機関を確保したり、宿泊施設を予約するのが

大変だ。全国一勢休暇の時期なのである。

カーニバルはリオだけでなく、サンパウロをはじめブラジル全土でやっているが、四晩ぶつ通して行うところが多い。一年かかってこの日のための練習や準備をする、というのだから、ブラジル人は、こんな催しが好きなのである。黒人の踊りといわれるように、黒人や混血（ムラートなど）がむやみに目につく。

旅行ができないときは、日系団体や企業などで、お話を受け給わるのがよい。勿論、カーニバル休暇をきめて四〜七日間程度休暇にしている会社もあるので、この時期ブラジル国内を移動するには注意を要する。

ブラジルの政治経済活動の中心は七〇年代はじめまではリオデジャネイロにあったが、首都がブラジリアに遷都したあと、サンパウロにその役割が移りつゝある。リオとサンパウロはほぼ同一緯線（南回帰線）上にあつて、距離にしても三五〇km程度の近さだ。

サンパウロは、外港サントスをもつが、このサントスには石油精製、製鉄、化学など、臨海型の工場が林立している。外資系企業も多い。

サントスから標高差八〇〇mの急坂を登りつめると、サンパウロの郊外だ。この坂は、新旧二本の連絡道路で、二都市を結びつけているが、石油のパイプラインもサントスからサンパウロに向けて二本敷設されている。サンパウロは標高八〇〇mの台地上にあるブラジル最大の内陸都市だ。サントスからサンパウロの郊外に向う道路沿いに、メルセデス・ベント、フォルクスワーゲン、フォードなど独、米のノックダウン工場が点在しているが、日本の自動車工場をみることはない。日本車を見かけたら大使館、領事館のものと思えばよい、といわれるほど、日本車は少ないのである。

アラスカや北欧の隅々まで普及している日本車がブラジルにないのには訳がある。ブラジルは、大統領自らが、外国から借入した資金を踏み倒す、といわれている。日本企業は、国が胴元になって、開発投

資など踏み倒されるところに資金を流さない。米、独は、それを承知で投資していく。その結果、日本企業の進出、ノックダウン工場の新設を認めない、と説明する人もいるぐらいである。

ミナスゼライス州のウジミナス製鉄所は、当初、新日鉄など八社が四九％、ブラジル側が五一％で建てた製鉄会社であるが、今日では、日本の投資比率は八％にさがっている。合併事業も外資を利用して国産企業を育てているようにみえる。

ともあれ、サントス〜サンパウロ間は、伯国の四〇〜五〇％の企業数が集まり、大きな雇用が生ずる地帯だ。

ブラジルは'73年までに一、一〇〇億ドルの債務を負ったが、これは、中東の産油国のオイルダラーが流れこんで、インフラストラクチャーづくりのための負債となったもの。

アマゾンに近いカラジャス鉄山は、大統領出身のパラ州にあるが、四〇％は日本向け（ちなみにブラジルから日本に輸入される鉄鉱石はオーストラリアに次いで二位（二八〇〇万t'88年）であるが、ミナス州とパラ州が多いのだ）。

製鉄所はコジッパ、CCLなどの鉄鋼公社八社が半官半民も含めて出来ており、鉄鋼の輸入国から輸出国への転換をめざした。

大型水力発電所も四か所ができつゝある。最大のイタイプはパラナ川にかかるもので、七〇万（kW）×一八基（二三六〇万KWh）が完成すれば、グリ（ベネズエラ）やグランドクーリー（アメリカ）を抜いて世界最大になる。

ミナスゼライス州を軸にしたセラード開発は五五万エーカーの農地開発を目的としている。

地下水を汲みあげ、灌漑用水を確保するとともに土壤改良して、大豆、とうもろこし、小麦の穀類をつくることになっている。日系産業組合も、この地に営農団地を造成して、分譲農場としてスタートした。いうまでもなくコチア産組だ。

トランスアマゾン開発は、アマゾン川の流域、ほとんどの本流にそって三二〇〇kmの自動車道路をつくるもので、ところどころ未舗装のところもあるが、ほとんどの出来あがっている。これも巨大開発の一つだ。

その他、鉄道や製紙プラントなど、数多い工場とそのインフラ作りが進んでいるのが今のブラジル。

こうしたなかで、日本の石川島播磨の投資による造船会社、三井アルミなど日本一〇社（四九％のシェア）が加わったアマゾンアルミやアルプラスなどがある。つまり合併事業が盛んになってきているのである。

七三年には、二〇人乗りの中型飛行機製造公社ができ、アメリカ合衆国の技術を導入して、航空機部門への進出もみられるが、これは軍部との関係が強い。

石油は、これまで自給部分が少なく、73年のオイルショックでは大きな打撃を受けた。石油が不足する分、さとうきびによるアルコール自動車走らせなければならぬ。'88年段階で国産自動車の四〇％がアルコール車、新車の八〇％が燃料アルコール仕様だ。政府はさとうきび栽培とアルコール販売の双方に補助金を出している。

燃費はガソリンの六〇％と悪いが、国策として、アルコール価を下支えしているので、ガソリンの六〇％で済む。輸入代替としての役割だ。

ところが最近、リオデジャネイロ沖のグアナバラ湾の大陸棚で、大きな油田を掘り当て、一気に石油消費の五五％の自給が可能になった。この傾向（石油の自給率向上）は、今後も続くことが予想されている。

ブラジル経済が中進国（NIES）から先進国にテイク・オフしない理由の一つに工業化を期待しながらも、いぜんとして農業が中心産業であるという点がある。だが、もう一歩駒を前に進められない背景は、別にある。

二一年続いた軍政が'86年、民政に移管した。軍政時代は、もっぱら外資導入と輸出優先策を先行させたが、民政時代になると、民衆運動の活発化が労働運動と結びついているので、外資が居づらくなった、ということがある。

民政は、新投資の停止、外資導入の減少を打ち出している。警戒のため、引きあげる外資系企業もあり、資産があっても運転資金が切れるなど矛盾がでてきているとの見方が有力。

ブラジルは、民政になっても、財閥を軸とした政体ができない。それだけ内部蓄積が遅れていることになる。

ブラジルの労働市場はどうか。

一、四億人の国民がいる。うち半分ほどは、字を書けない、読めないの文盲だといわれている。

文盲の子供達は、両親と一緒に農場で働いていることが多いし、仕事があればスラムなどでブラブラしている。

最下層を形成し、スラムに住んでいる人々の多くは北のノルデステ地方から、南伯に流れてきているいわば内国移民が多数を占めている。北部と南部の経済格差や雇用吸引力の違いが人の南流現象を生むのだ。ノルデステ地方はほとんどの三年に一回の割合で早魃に見舞われ、農業労働者予備軍は再生産されても、就業先に恵まれない。

多くの大都市周辺には、必ずといってよいほどスラム（ファベラ）がある。サンパウロ大の隣接地には人口二万人のスラムが形成され、大学の現業職員や女中、下男、農場労働力として通勤している。

下水はタレ流しだが、電気もきていれば、水道もある。スラム内に安い飲み屋や撞球場、食堂があったりする。スラムは貧民窟の不就業地帯というより、低賃金労働力の滞留場所である。いそぎが漂っている。

スラムに家を建てる材料や家具、家材は、専用の販売施設で調達しているようだった。泥棒市場のたぐいかもしれないが、彼らに対応するマーケットが成立しているらしい。

二〇年もスラムに住めば、住居を持つことが仮に違法でもあらうとも、もう自分のものと自他共に認め合ってしまう。スラム内に自治組織もあって、一定の秩序が支配しているがアメリカ合衆国のような危険性はない。誰でもスラム内を歩けるし、住人は素直に対応してく



サンパウロ大学隣接のスラム・人口2万人の集落を形成しているが写真はその一部

れる。これがラテン民族とアングロ民族の違いか。

南米大陸をスペイン人は「剣」で征服（血を流して闘いとった）し、ポルトガル人は「やり」で征服（やりとは男根のことで混血化をすゝめた）した、という。

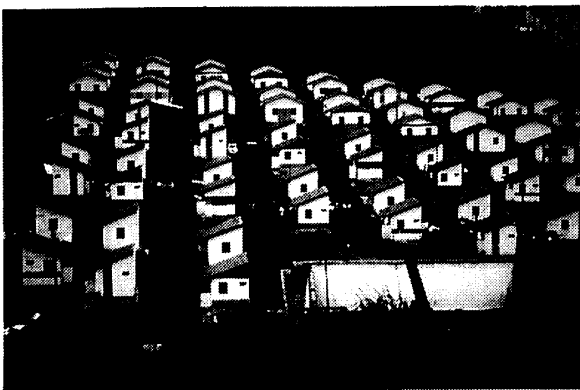
スペイン人は気性が激しく、荒々しいが、ポルトガル人は、おとなしく、温厚である、の意である。方法の違いはあれ、南米はこの二つの民族支配によって著しく同化が進められた。

これまでブラジルでは物はなくなるが、人殺しはめったにみない。泥棒は多いが、殺人は少ない。マフィアが成立しにくかったそうである。

スラムでは朝から酒を呑んでいるのいれば、撞球をしている者もいる。一日の日給は二百七〇円（二二四クルザード、'88年二月）程度だといわれるが、民政になって労働時間は週四〇時間以下になりつつある。産休は百二〇日から百八〇日に伸ばせ、など要求を出してくる人々がいる。

今でも中流以上層にはたいい女中をおいている。今までは、雇う側の家に女中部屋があつて住みこみで働いていたが、労働時間の問題などで自由がきかなくなったとして、スラムあたりからの通勤が一般化し、住み込みは減少してきた。これは、農場労働者にもいえる。オーナーの方も、農場内に住みこませるより、通勤をすすめているところが多い。この方が面倒でないからだ。

これではスラムがますます膨らむことになり、市はこれらの一部をまさにマツチ箱のような建売住宅（カーザ・ド・ポブラール）に移動させている。だが、住宅建設を越えてスラムがふくらんでいるのが実



カーザ・ド・ポブラール・一戸建ての公営住宅でスラム街に住んでいる人々の一部を引きとる

情である。

スラムに棲むつくのは、公有地の不法占拠であるが、住んでしまえば、政府も自治体もアフターケアに動くところがブラジルらしい。

'88年は、ブラジルにおける奴隷解放百年であった。「アグリソの歌」を唱い、母なる大地アフリカに帰りたい、と要求する黒人達もいたらしい。

ブラジル社会では人種差別は比較的少ない。黒人に高級官僚、判事、検事、警察署長が多いのも特徴だ。

半グロといわれる混血人種（父親が白人、母親黒人の子供はモレーナ、その逆はムラート）でも必ずしも下級肉体労働者になるわけではない。

人種よりもむしろ学歴による給与格差が非常に大きい。低学歴の給与は、高学歴者の二〇分の一といわれるゆえんである。

これは'88年二月の数字であるが、労働者賃金は、最賃制によって月五〇〇〇クルザード（六千五〇円）二〇日で割り、日給二五〇クルザード（三〇三円）、一般女中は日給三〇〇〜四〇〇クルザード（三六三〜四八四円）パイロットの月給は五五万クルザード（六六万五五〇〇円）である。この差は百一〇倍にもなっている。

ブラジルの日系人は、誰もが高学歴をめざそうとしている。そのことが出世への最短距離であるからだ。

ロンドリナ大学（パラナ州）の医歯系は三〇％が日系人だ。八八年入学者は三〇名中、二一人が日系人と圧倒していた。特に女性の志望者は四〇％と高い。

日系人医師はロンドリナ市で百二〇〜百三〇人（開業医八〇、大学病院勤務医四〇〜五〇）で歯科医は二百名を下らない、というほど、この分野に進出している。

これは、高学歴で高収入を保証することが手取り早い出世コースであることをよくあらわしているといえるだろう。

第二次世界大戦前、サンパウロ州のリベロンプレットに入植した日本人とイタリア人は奴隷扱いを受けていた。勿論、初期日系開拓者に共通した待遇が、非人間的低賃金労働であったのである。この苦しみや悲しみ、怒りは、働いて金を残すこと、子供に教育を授けて、いい職業（金になる、評価の高い!!）につけることへの意欲に転換せしめた。

ブラジルに住む日系一世の人々は、決して恵まれて渡伯したのではない。第二次大戦後の移住者とはかく、戦前の人々は、ブラジルの未開の大地でよく働いた。それは、節くれだった頑丈な手、体格、そしてなにより優しい顔によく表現されている、と思う。

コーヒー小作に入ったときは四年契約、六年契約のような形で、山を切り、コーヒー樹を植えた。だが、すぐ収穫できるものではなかった。

間作による副収入で、コーヒー未収穫時は食いつながなければならなかった。米、小麦、フェイジョン豆、大豆、とうもろこし、などをコーヒー樹の間に植え、収穫を待つ。自給用と販売用の作物を計算して植え、育てるためには、夜一〜一時位まで、野良仕事をしたという。

少しでも野良仕事に余裕があれば、箒を編んだ。ジャッカという箒二晩編むと三つができた。賃金にすれば二日分である。

天野吉太郎氏は、吉井氏の家でウラジをぬいだ。一〇才で渡伯し、今は六五才、七五〇haの農地を有すフィゼンディオ（大地主）である。七五〇haは、羽田空港の全面積の二倍にあたる。ジャッカ編みは彼の話である。

ブラジル開拓で、最初の仕事は、巨木の伐採だ。たいした技術が必要ないように思うが、人によって能力は二倍〜三倍違う。ガラガラヘビが多く、危険な土地であった。ヘビに咬まれて、死んだ人もいた。

巨木を倒し、下払いをしてコーヒーを植えるのだが、縦二五cm、横

三〇cm、深さ二五cmの穴を掘り、コーヒー苗を植え、板でフタをする。間隔は四センチメートル四方で、普通の人は一日二五〇の穴を掘るのだが、日本人は、毎日四〇〇コの穴を掘ったので、外人はそのスピードに驚嘆した、という。

穴掘りは男性仕事、マサカリ、クワ、スコップを使った。女性は、幼木コーヒーの植樹を分担した。

これが終って帰宅すれば、ジャッカ編みの毎日である。食糧が不足して、ヤシの実、さつまいも、コゴミなども食べて生きつないだ。

こうした苦労の末、やがてシチアンテ（自作）になりファゼンデイロ（地主）の道を歩むことが出来たのである。

アサイの島田家に日系人が集まってきた。アサイは、パラナ州ロンドリナ市のやゝ東にある街だ。こゝは日系人比率の高い街で知られている。福島県からの入植者が一番多いが、北海道からの入植者もかなりいる。

島田さんは深川市出身の一世である。全部で六人の日系人が集まった。移住者北海道協会長の平栗氏は、娘を二人日本に置いていく。姉のソフィアは北大留学後、「HIT」という道政政策集団の構成になる会社就職しているし、妹のミカエは、目下、北大留学中である。

アサイでは、これまで日本への留学生一二名を送り出している。皆日本語のできる二世、三世である。しかしまだ間口が足りない、と増員を要求しているし、県別選択枠にしてほしいとの望みもある。

日系一世は、あまり高学歴の人はいない。だが、子供には、大抵大学まで進ませている。日中働いて、夜間の大学で、学んでいる二、三世もかなりの数に達しているのだ。

アサイ市は一二人を日本への留学生として出しているが、これは人口割にして、最も高い比率と思われる。

今のブラジル人は誰もが、若い時、日本で勉強したい、と考えている。だが、日本語ができなければ、日本留学は無理であるし、道庁で

あれ、国際協力事業団であれ、ロータリークラブでも、費用を支給してくれる枠に入れてくれない。

その条件を整えて、日本に行きたいのだ。

島田家でも、集ってくる人々の口からブラジレイラの問題点が出された。

そういえば、同じ、この島田さんから七年前の'81年八月に、パラナ州・アサイの公民館で話を聞いたことがあった。

そのときの言葉で、忘れられないのは、「日系人は純血を保つ努力をしている。結婚も外人とはあまりしないし、日本人同志のつき合いに配慮している。二世の世界も見あげたものだ」と。

ところが、わずか七年後の'88年二月、今度はアサイで次のような話を聴く破目になった。

「最近、急速に二、三世の結婚が、純血から混血へ向ってきた。特に日系男性と白人女性の結婚が多い」というのだ。

一世の人々が、何故国際結婚を嫌うのか、理由は次のようなことである。

国際結婚をした人々は、急速に、心境変化があらわれる。

「日本の映画をみない、日本人、日系人の店に寄らない、日本人を嫌いはじめることもある。食生活も、日本食から洋食へ変化するし、男性が日系人でありながら、ほとんど男性側の家に寄りつかなくなる。息子を盗られてしまった感じになる一世達も多い」である。

一世にしてみれば、日本的伝統や風俗習慣が崩れて、ブラジル化することへの抵抗がある。宗教も仏教とキリスト教がはげしくぶつかる家庭もでてくる。神への信じん深さではブラジル人の方が強い。その結果、どうなるか。日本語だって興味をひかなくなる。日系人である以上、日本語ぐらいはできないか、と思う一世の心とは別に、「いつまでも日本のことをいつているんだ、こゝは日本ではない」、これが若者の返す言葉である。

(5) セラード開発と移住

島田家は、'78年セラード地域のウベラバに二、〇〇〇ha（八〇〇アルケール）の土地を購入した。パラナ州アサイから車で七〇〇kmほど北のところで、一アルケール（二、四ha）が、米に換算して五俵分、全部で二、〇〇〇万クルゼイロだった、という。

このウベラバは、もともと牧牛地帯で、放牧地であっても穀物などは生産していなかった。

島田氏の弟家族が、はじめて大豆、コーヒ、さとうきびを栽培して成功させたのである。

七七年にはミナスゼラエス州サンゴタルド（パダップ）にも一、七五〇ha（七〇〇アルケール）の土地購入をしている。

こゝは、いぜん小麦地帯であったが、大豆、さとうきび、コーヒ、小麦など多作目を多角的に栽培することに成功した。

このパダップは、日系コチア産組の営農団地が'73年開かれ、セラード開発の嚆矢になったところである。これは北パラナの組合員の二〜三男対策の拓殖分譲地としてつくられたものだが、二四、〇〇〇ha（九、六〇〇アルケール）を連邦政府から分譲されて、一区画二五〇ha、九一ブロックで売り出した場所だ。三区画を購入し、穀物栽培農業にのり出したのである。

さらに、長男と次男及び弟の三人に、このアサイから一二〇〇kmはなれたセラード地区のパラカトゥーに三、二五〇ha（一三〇〇アルケール）の土地を購入した。

パラカトゥーは、ミナス・ゼライス州西部でブラジリアに近いセラード地域である。

農業経験があり、親に資金的支援ができた北パラナ州の人々が多く入植している。

弟は一、五〇〇ha（六〇〇アルケール）を所有しその半分は米をつ

くつてゐる。一ha百三十俵の収量がある、という。二〜三毛作も可能で、諸作物を組み合わせつつくっている。反収十三俵は、北海道平均をはるかに上まわる生産力だ。

長男は一、〇〇〇ha（四〇〇アルケール）で大豆を主体とした農業、次男は七五〇ha（三〇〇アルケール）で大豆、さとうきび、小麦などをつくっている。

それにしても、この規模に驚く。三人で三〇〇〇haを超えるのである。

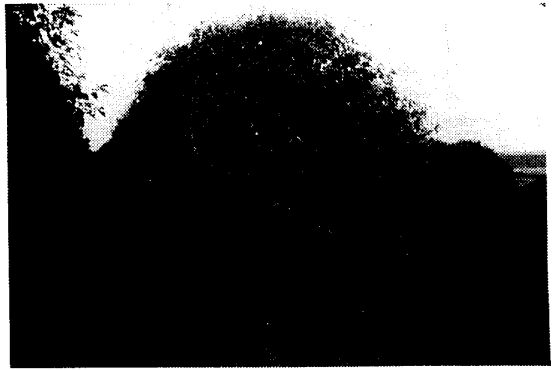
しかし、さらに驚くことは、ミナスゼライス州の北、バイア州に一〇、〇〇〇ha（四、〇〇〇アルケール）の土地を、一アルケール、わずか米五俵分、七〇〇〇クルザードで購入したものだ。一haに換算すれば、米二俵でバイアの土地を購入できるのであるが、何せ距離がある。アサイから二、五〇〇km北北東の位置なのだ。通勤耕作など出来よう距離ではないのである。

バイアにも、日系コチア青年の営農団地がある。土地は無限に広大、平地が多いなど好条件に恵まれている。

金融面でも、日本の国際協力事業団が土地代、機械購入費の一部を長期、低利で融資してくれるし、その他、投資、営農のための資金の多くは、ブラジル銀行が融資する、などの有利性がある一方で、自己資金も相当額必要とされる。

島田家は、バイアの一〇、〇〇〇haを使って、穀物など栽培するが、アメリカ製の灌漑施設ピポーセントラル九基を所有する大型機械農業をやっている。

こうして、セラード地帯のミナス州やバイア州に土地を広げ、家族をまきこみ大型農業に踏みこんでいる。島田本家はアサイに三二五ha（一三〇アルケール）をもつファゼンデイロだ。ミナスやバイアの土地に比べると少ないが、ここだけでも羽田空港全域の広さには匹敵する。



島田家のコーヒー園（アサイの土地）・コーヒーは一たん植えると40～50年は収穫できる



ブドウ選果アルバイトをする現地人労働者・彼女は夜間高校に通う

五〇六個所に地積が分散している土地ではあるが一六三haに大豆、五〇haにコーヒー、二五haにさとうきびを植えている。

大豆は、この一〇数年年位の間で、ブラジル最大の作付面積を有するメジャークロップにのしあがったのである。

大豆は油の原料であるが、輸出向けが多い。アメリカ産と比べ、コストの差があり国際的な競争力の面で不利に働いているようだ。

ほかに、綿花二五haをつくっているが、これはアサイにある日系のコチア産組製綿所で加工される。

ブドウも四百五〇本ほどつくっている。種類はネオマスカットによく似たイタイキである。

牧場も少々やっている。コロニオンという「いね科」のカヤのような牧草を播き、肉牛のネローレとゼブ種を飼育する。

前は養鶏と養豚で堆肥をとっていたが、今は縮小してブタのみ二百頭ほど飼養している。畜産の規模はかつての七分の一になったが、有機質肥料自給のためこれをやめるわけにいかないのだ。

今、ブラジルでの大きな問題となっているのは、地力の低下である。肥沃な土壌の多いパラナ州などは三〇～四〇年も、無肥料栽培の掠奪農業をやってきて、地力が減耗し、その後は即効性のある化学肥料を多投した。しかし、化学肥料で地力が回復するものではない。有機質肥料が必要になってきている。堆肥づくり、家畜の厩堆肥などを利用する以外土づくり方法はないのである。

一方で、輪作による地力バランス維持も進んできている。かつてのモノカルチュア的土地利用は、大きく転換して、多角的農業になり、その根底に輪作の理念が浸透してきた。とはいえ、時折々の需給状況から、必ずしもローテーションが、うまくいくというわけではない。ブラジルの風土は、一年二作、つまり二毛作が可能である土地柄だ。一年二作となれば、地力の消耗は更に激しく、改めて土づくりが見なおされているのである。

セラードに入植し、開拓に従事するのには一つの大きな悩みがある。日系企業ともいわれるコチア産組の売り出す営農団地を購入するなら安全であるが、仲介業者を通して、広大な大地を購入する場合、悪徳業者がいて、地券を何枚も発行したまま、逃げてしまうなど、日常茶飯事だ、という。ひどいのは、三十枚も発行した例があった。古いものに価値があるといっても、三十人が、これは俺の土地だ、地券をもっている」とみせあったところで、土地は一つしかないのだ。

警察は逃げてしまし、役所は偽造文書だと取り合わない。

あとは殺し屋を雇って決着つけるしかない。

クヤバ（ロンドノポス）では、殺し屋同志の闘いで、時折一人や二人の殺し屋が死んでいた。彼らは機関銃を持ち、要塞まで構築していた、というのである。

殺し屋は、ブラジルでよく聞く言葉の一つである。彼らはマフィアのようなものであり、一、〇〇〇クルザードも出せば、大統領も殺してや

る”、と豪語しているらしい。

一種の雇用兵か、雇用警察のようなもので安く雇えるのだ。

警察で、いわば派出所勤めというのがある。彼等は年末になるときまって各フアゼンダを訪れ、公然とワイロを要求する。仔ブタを欲しいとか、仔牛をよこせ、と農場をまわってワイロを請求するのである。

このつけ届けをしないと、農場の雇用労働者が、交通違反をおこしたり、不始末をしでかした場合、もらい下げが出来ないし、故意に犯行をでっちあげられたりする。ブラジルで一番こわく、信用できないのは警察官だ、とは、日本でもよく聴かれる言葉だ。

すべてが、袖の下政治、警察だけでなく官僚機構そのものがワイロと結びついて地下経済をつくっている国なのである。

(6) アサイのさとうきび、綿花

さとうきびは、もともとガンジス川流域が原産地であったが、ブラジルに大規模に栽培されたのは一五七〇年ごろからとされている。

インディオ労働では、役立たないとして、アフリカから大量の黒人奴隷を導入してプランテーション農園をつくって拡大させたが、主産地はアマゾン下流のマデイラ島や北東海岸部のいわばノルデステ地方であった。この地方の気候と土壌によく合う作物だったのである。

むろん、仕向先は、砂糖で、今日のようにアルコール向けは少なかった。北部から中部、そして南部へと産地は拡大するが、南部に本格的に栽培するようになったのは十八世紀に入ってからとみてよい。

さとうきびは、最暖月二七℃以上、最寒月一七℃以上、年降水量一、〇〇〇mm以上、それも乾季と雨季があつて、雨の大半は雨季に集中してほしい、いわば熱帯サバナ型作物なのである。

多年生作物であるから三〜五年はもつが、年とともに収穫量が減っていく。最初は播種して収穫まで一五か月ほどかかる。暴風がなく、排水の良い土壌であればもっとよい。こうした条件を満す地域はブラ

ジルには広大にある。南部はやゝ涼冷だが、サンパウロ州やパラナ州は、さとうきび栽培に十分適性があるといえよう。

だが、今日ブラジルで、さとうきびを生産するのは、アルコール生産の目的が圧倒的に多い。石油不足を補うエネルギー政策として政府は、さとうきび栽培農家に経費の三〇％を補助している。政府はアルコール自動車を奨励しているから、燃料費も一リッター当たりガソリン五〜一クルザードなのにアルコールは三〜一クルザードですむのである。さとうきびの連作は好ましくないが、補助との関係で連作農家もでてくる。

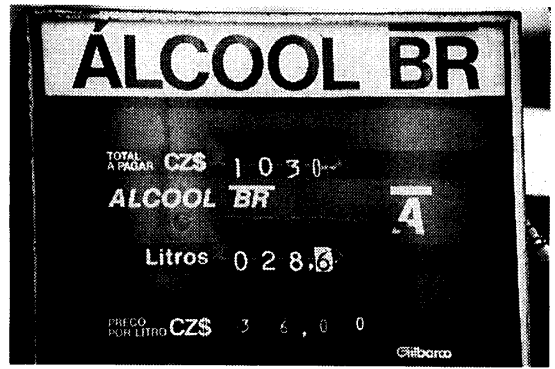
パラナ州アサイでも、さとうきび栽培はメジャークロップに位置づけられる。アルコール工場が、あちこちに林立しているし、その付近は沖繩のさとうきび栽培などに比べ、えらく成長のよいさとうきび畑が分布している。

さとうきびは六月から切り出し、四〜五月で終了する。アルコール工場の操業期間は五〜二月までの季節対応だ。

一二万ℓに四〇〇ℓのフェルメント発酵剤(酵母菌)を入れ、さとうきびしぼり液四五ℓから一ℓのアルコールを抽出する。さとうみずはきび一ℓから八〇〇ℓがとれる(これは糖度が一八〜二一％の場合の基準)。

アサイにはイタリア人の経営するアルコール工場があり、二、〇〇〇万ℓのタンク三基と三、〇〇〇万ℓのタンク一基があり、月産一、三〇〇万ℓを生産している。一日のさとうきび処理量は一三〇t、搾り粕からは紙や板(糊をまぜて)、肥料などを生産できるが、アサイの工場では、これを燃料として利用している。

アルコールは二段しぼりで、最初七〇％、再度蒸溜して九〇％まで搾りこむ方式。工場一つ成りたゝせるためには二、五〇〇ha(一〇〇〇アルケール)のさとうきび栽培畑が必要だ、というがアサイ工場は原料が少々不足気味らしい。



アルコールエネルギーのサービスステーション・アルコール工場内にガソリンと並んで販売されている（アサイ）



収穫期の綿花の取り入れ風景・人力が主体で、現地人はノルマ給制度があり、よく働く（アサイ）

工場内にガスタンクがあり、アルコールとガソリンが別々に販売されている。アルコール自動車は、特有の燃焼臭がして嫌がられるが、ガソリンに比べ、排気ガス公害は少なく、好評である。

アサイの綿花栽培は、一面見わたす限り綿花地帯という密度の濃いものではない。点在栽培の感じである。二月中旬は、丁度収穫期で、多くの現地人労働者が働いていた。アメリカ合衆国の綿作地の収穫風景はハーベスターの動きまわるのに代表される徹底した機械による収穫化だが、ブラジルは、手作業の摘みとりと肩や頭にのせての運搬だ。

綿花も、さとうきびと同じく乾季と雨季の明瞭な亜熱帯地帯が適している。年降水量は五〇〇mm以上あればよいし、無霜期間は二百日以上だから、パラナ州はその条件を満たしている。加えてよいことに、この地帯は、肥沃で保水性のあるテラローシャ土壤が部厚く堆積している。もともと生産地がアジア、アフリカなどといわれるが、コーヒーとならんで伝播にはよい条件が整っているのだ。

アサイの綿花は南半球、春（九〜一〇月）に植付けし、四〜五か月

で開花、結実させて、秋の三月には収穫する。四月には播き、二毛作畑として土地利用する農場が多い。

収穫を機械化しえない一つの理由に、結実が一定化しない、出そろわない、ことがあげられる。

よく観察すると、綿になっている部分があるのかと思えば、まだ開花中のものもある。これは、天候が一定しない、不順のときにおきるといわれるが、一斉開花、一斉結実のため枯葉剤などの薬品を利用することもある。

もう一つは人件費だ。収穫に要する労賃が比較的安い。一アローバ（一五kg）を七五〇クルザードで売るとすれば、労賃は七〇クルザードと十分の一以下である。コーヒーも労賃は販売額の一〇%、大豆は五%程度に示されるように労賃コストが著るしく低い。その結果、綿花も豊作時は純収益七〇%となり、凶作時には一〇%〜九〇%と振れるのだ。豊凶作は、他の諸地域の綿花の収益状況に大きく影響を与える。

ブラジルは広大で、同一作物でも、地域による豊凶が非常に目立つ。日系人のコチア産組は、全ブラジルにネットをはり、それぞれ年度の豊凶の状況をいち早く調査し、情報を組合員に流すとともに、価格調整機能を発揮すべく努力にいとまかない。

綿^{わた}は、結実期の雨に弱い。品質が下落するので、価格も下がる。ゴヤス州の綿花は三年に一回、雨の害にやられるといわれる。

アサイには、「コチア産組」直営の製綿工場がある。ここでは、綿と綿実子をわけ、綿は二〇〇kgの束にしてサンタカタリーナ州の紡績工場へ、実子は、近くのロンドリナで綿実油にされているが、今日では、アサイに、コチア直営の紡績工場が開業し、地元で一貫加工システムが出来た。ブラジルの中で、コチア系紡績工場は、アサイに唯一か所あるのみだ。

製綿工場には、毎日百台の車が綿花を運びこむ。二月〜六月までの



コチア産業組合アサイ製綿工場に運びこまれる綿花



製綿過程で綿花の中の綿実子を取り出し、200kg束にして紡績工場に送る（アサイ）

季節操業で、二〇〇kgの製綿梱包箱が四万個製造される。これはアサイおよびその周辺四百戸分の綿花生産を一次加工したものである。

農業労働者の、賃金算定方式は、今日、日給制が支配的になっているが、綿は、つみ取り段階から工場での作業工程まで歩合制がとられている。そのためか、現地労働者は飛びまわるような働きぶり。これを見てみると日本人顔負けの感じであるが、彼らは貯蓄とか、お金の使い方を知らない。それが、土地所有者やオーナーになれない理由だ。

コチア産組アサイ製綿工場の中上主任は、規模に見合った作目選択を語ってくれた。経営規模、つまり土地所有規模が小さければ、果樹、野菜、養鶏、ハウスなど高生産性のものをやればよい、日系人はそれで見事に成功した人々が多いが、現地人にはなかなかできない、と。

(7) ウライのラミー生産

ウライは、パラナ州北部の小さな町、ロンドリナから東に三八km、

アサイから北に二〇kmの地点にある。日系人の比較的多い町で、ラミー（苧麻）の生産で特色づけられる。

アサイは、ポルトガル語「ヤシの実」「アサヒ」から来ているとし、ウライは同語「水たまり」の「ウラヒ」から来た地名であり、日本語ではない。

ウライは、ラミーの生産でよく知られている。ラミーは英語でチャイニーズ・シルク・プラントと呼ばれ、イラクサ科の繊維作物だ。ラミーはマレー語らしい。日本でも古くから山形、福島、鹿児島で栽培されていたが、今はほとんどない。

ラミー糸は、麻ロープや麻袋に織られ、タタミ糸、靴糸、カーテン、ガス燈の芯、ハンカチーフ、漁網など用途は広いし、レーヨン、綿、羊毛との混紡にも使われる。

雨量が一〇〇〜二〇〇mm、年平均気温二〇〜三〇℃、土壌はテラローシャが最適（酸性はダメ）の条件が満たされればよいので、パラナ州では十七の郡で栽培され、六万人がラミー栽培で働いている、といわれる。

ラミーは高さ一〜二mの半低木で、一〇〜一二月の雨期に定植し、六〇〜七〇日で収穫する。写真でみるように、人の背丈ほどもあり、一寸、たばこ栽培の景観を思わせるが、収穫と同時に、その畑の中で雑ピキ（ピリキット）といい、モーターをまわし、圧搾して、繊維だけをとり出し、同圃場内で乾燥させるため、ハサのような形で棒に吊さげておく。

通勤の雇用労働者との契約は、1kg処理に対するの値段、つまり歩合給とし、生産をあげてきたが、70年をピークに、減少しはじめている。雑ピキ作業は、昔よく使った動力式脱穀機のような圧搾機械で、繊維をとられないように強い力が必要とするが、時折手首をものがれてしまうことがあるとはタムラ市長の弁。

ひところ、ウライの人口は一、五万人なのに六千人も手首のない人

がいる。そして事故防止が政治課題になったこともあるが、この数字は明らかにオーバー。

ラミー雑ピキで、手首をなくした人は百二〇人位、手首や指に怪我を負った人八百人が実数である。

シザオ（パイナップルの葉に似ているが、繊維は硬く、船のロープに使われる麻）も、同じ雑ピキで、手首を損うことが多いうえに目も痛める、など事故を伴う作業工程のある作物だ。

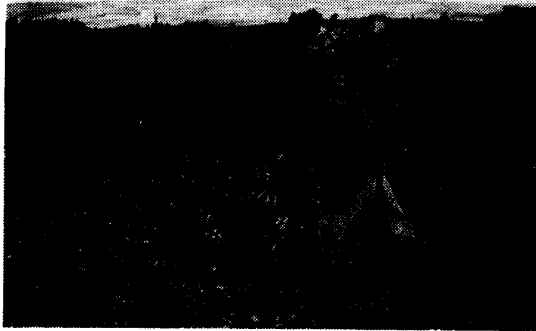
事故を負っても、保険に入っていない、または入れない労働者は、医師、病院が治療してくれない、など社会問題化したものであった。

今日では、機械が改良されて、手首が吸い込まれない装置がついているので、事故が減少している。

農場で収穫時に出るラミーの葉は、家畜のエサになるが、自給用ならまだしも、販売用としては引きあわない安値だ。ラミー収穫は危険なこともあって日給は五〇〇クルザード（ブラジルの平均は一七六クルザード）と高い。



ラミーは現地人労働者の手作業で刈りとられる（ウライ）



ラミーは人の手で運搬され、雑ピキされる・雑ピキで手首がもがれてしまうことが多い（ウライ）

雑ピキ乾燥を終えたラミーは、紡績会社に運ばれ、糸に加工される。かつては四二工場もあったが、今日では一二工場に統廃合した。ほとんどが日系企業でイチムラが六〇弱%、トヨタ二〇弱%、帝国繊維二〇%弱のシェア日系企業に独占されている。

ラミーには、政府支持（最低保証）価格があり、一kg三〇クルザードと決められているものの、インフレと買い上げ価格の変動でゆきぶられることが多い。

日系コチア産組は支持価格の二倍で買いあげてはいるが、全般的に買い手市場だ。

もともとウライはコーヒー園中心だったが、今日では、その跡にラミー、ブドウ、牧草が加わり、複合化してきた。しかし、ラミーはもう一つよくない。牧草地は、黒牛のジロー、白牛のネローレを放牧している。

ウライに、ブドウ栽培の日系農場を訪ねてみた。福井県出身の笹島彦恵農場だ。七haのブドウ園をもち、労働者五家族を雇用している。

種類はイタリア系ルビーが中心だが、驚いたことに、ブドウ棚の上に、ビニール（霜よけ）やネット（雪よけ）が張ってあるのだ。

ブドウ棚は、日本の甲府盆地や余市、仁木の方式と同じで、いわば西洋型の安物での支柱とはりがねにしようせるものではない。

生食用出荷をねらうということでもあるが、なにせコストがかかる。この農園も以前はコーヒー畑が霜害と雹害でやられたことからブドウ園に変えたが、やはり対策は施さねばならない。ビニールを張れば、温度調節も出来、多少の出荷調整も可能であるが、出荷量の少ない一〇〜一二月をねらったにしてもペルナンブコやバイヤ（北伯地方）の

ブドウと競合するし、ミナスゼライスのモモやマンゴーとも争わなければいけない。市場は、サンパウロのセアサなど大都市域だ。

ウライ市長のタムラ氏は、ブラジルのウライやミナスゼライスに延べ、五、五〇〇ha（二、二〇〇アルケール）の土地を保有し、コーヒ

1、大豆、ラミーなど生産するほか、隣国パラグアイにも二五〇〇haの農地を有し、八百人の農業労働者を使って穀物農業を行う一大ファゼンデイロである。ウライからパラグアイまでの距離は七〇〇kmだ。

ファゼンダ、が大農場で、規模が大きい、とは知っていたが、いくつもの州にまたがり、また外国にまで土地を保有しているファゼンデイロ（大地主）達に改めて驚嘆した。

ウライから北西に四五km（ロンドリナの北方七四km）いくと、大河川パラナ川につき出すように、プリメイロ・デ・マイロ市がある。この付近は、堰止められたダム湖のカピバラ湖が北側に口をあけている。幅は一〇kmにも及ぶが、西流するパラナ川に南北から数多くの支流が流れこみ、これらもダム湖となって広大な湖面をみせている。さらに下流のイグアス滝付近には、世界最大のイタイプ発電所（一二六〇万kW）を有するダムもあるし、上流にはまた、広大なイラッペダムによって堰止められたチャバンテス湖があるなど、パラナ川は、内水面域が広大である。

ウライからプリメイロ・デ・マイロまでの道沿いは、北パラナを代表する作物畑が展開する。

大豆、とうもろこし、綿花、さとうきび、小麦、フェイジョン豆などが、広大なモザイク模様を描き出していた。

谷口幸一氏のいるプリメイロ・デ・マイロには、日系人が殆んどいないので、外国の町に日本人がまぎれこんだ感と表現した。道産子（江部乙出身）で、入植してもう三十二年になる。彼は一六haから最大一〇〇haの圃場を二三区画、合計六〇〇ha（二四〇アルケール）所有のファゼンダで、小麦と大豆を主作にし、若干の牧牛をやっていた。最初、小区画の土地を購入（半分持参金、半分借入）して、翌年、全部支払って、この土地を担保に、他の土地の購入資金を借りる。地価の三〜一〇倍の借入金が可能である。

こうして、借入金による土地購入を次々と展開し、二三区画の合計

が六〇〇haとなったのだ。

借金はインフレに強い、というか、インフレは借金を目減りさせる役割をもつ。預金はダメ、土地投資が良く、銀行資金のみでなく、政府融資も一〇〇％利用する。が谷口氏のモットー。

営農が下手で倒産する農家も多いし、少々遠くてもよければ、土地はいくらでもある。日系人は、銀行や行政の信用が高い。借入金を踏み倒さないし、成功する人々が多いからだ、が谷口氏の弁。

肥料、機械、飼料、種子購入、倉庫建設などすべて融資の対象と出来る。小地主では一〇〇％、大地主で四〇％程度、運転資金として使えるのだ。

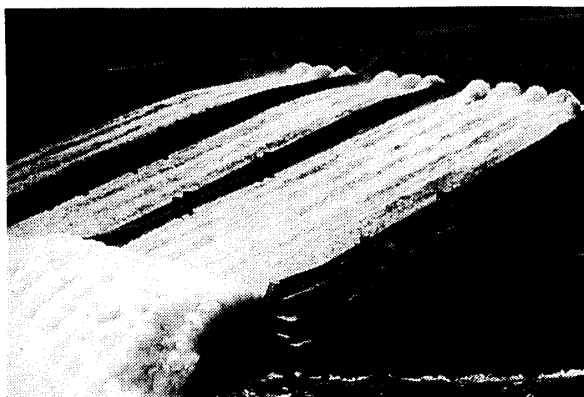
年間、千数百％のインフレが恒常化しているブラジルで、一定の自己資金を不動産化している人々の鼻息は荒い。

(8) イタイプとイグアス

'80年代、世界最大の水力発電所はグランドクーリー（米・コロンビア川）か、クラスノヤルスク（ソ連・エニセイ川）か、の首位をめぐる攻防があった。その頃の発電量は六〇〇万kW前後をして世界一といっていたのであるが、一九七五年着工のブラジル、イタイプ発電所は、完成すれば一、二六〇万kWとなるというから、計画発表だけ聞いても度肝を抜かれたものである。どんなスケールになるのだろうか、'84年から動き出したが、いつ完成するのか、など興味をひかれてきたし、一度はこの目で見たい、との希望もあった。

ロンドリナでレンタカーを借りて、パラナの畑作地帯をまる一日走ってもみなかった。

借りた車はサンタナ（フォルクスワーゲン社）レンタカーとはいえず、運転手つきだ。運転手はつけても、つけなくても値段はあまり変わらない。運転手は字も読めないし、計算もできない。言葉はポルトガル語以外わからない。それで、高速道路でもない道を時速一六〇km位で突



完成すれば世界一の発電量となるイタイプダム
(パラナ川)

走る。

パラナの波状台地は、お決まりの土地利用、麦類、大豆、とうもろこし、さとうきび、フェイジョン豆、綿花が、モザイク様に展開するだけ。アメリカのネブラスカなどを走って見る景観に似ているが、パラナの方が作目が多くて複雑。アルゼンチン、パラグアイとブラジルの三国々境まで、ずっと同じ風景が続く。パラナ州の土地利用は濃度が高く有閑地や森林をほとんどみかけない。

夕方、イタイプに着く。パラナ川を堰止めたダムの高さは一九六m、ダムサイトから激しく放水が流れ出して末端で宙に舞いあがるよう工夫されている。ダムの長さは七、七四四mだといわれるが、全部はみえない。七〇万kWの発電機一八基で、二六〇万kWとするのだが、作動しているのは八九年で一一基七四〇万kW分である。これでも今ではベネズエラのカロニ川にかかるグリ発電所(一、〇三〇万kW)、グランドクリー(七四六万kW)に次いでいる。

満水面は標高二二〇m、長さは一九〇kmである。パラナ川には三十のダム計画があり二五〇〇万kWの総発電量が予定されているが、これにはイタイプは、含まれていないのだ。

湛水面積三五〇km²、総貯水量二九〇億m³もすごい。

一四門のゲート(放水部)はコンクリート打設になっている中空動ダム部分が全体の二九%、その左岸ロックフィル部分が四二%、兩岸の端部はアース式で二九%の三部構成のダムサイトである。

要するに「コンクリート」と「土砂」と「礫」の三種類が一つのダムに使われている。ダムサイト八km近くもあるダムならではの構成だ。洪水時は十四の放水路を一斉に開けば、最大六万二〇〇m³/分の水が放流できる。

イタイプダムは、ブラジル・パラグアイ両国の共同開発で、外債に大きく依存しているが、総工費は一〇〇億ドル(一、三五〇億円)が予定されていた。

目的は、発電がメイン、舟航、灌漑、洪水調節、漁業、観光なども含まれている。

観光客は、年間七〇万人ということであるが何十台ものバスが、事務所からダムサイト上をぬけ、Uターンして帰るコースを行ききしている。やはり、世界最大級の物には人が集まる。

投資額は膨大だが、発電コストが安く、他の発電所と比べれば七〇%程度と、説明されている。

イタイプとは「岩の音」ないし「岩の音楽」の現地住民語である。

グランドクリーも、クラスノヤルスクも見ただけで、イタイプのスケールがわかりにくい、七〇万kW一基だけでも、黒部発電所や、佐久間ダムを上まわる規模だ。それが十八基とは驚く。広漠としていて、あつけにとられた、がすなおなイメージであり、内容は事務所にある展示館にすべてがそろっている。



世界三大滝の1つイグアス滝・アルゼンチン、ブラジル、
パラグアイの三国々境にある

イタイプダムとイグアスの滝は、目と鼻の先という至近距離にある。イグアス滝は、アフリカのザンベジ川にかかるのヴィクトリア、米加国境のナイヤガラと並んで世界三大滝と呼ばれている。植民地時代は、サンタ・マリア滝と命名されていたが、独立後は、インディオ語でイグアス（すごい水の意）と改められた。

ルーズベルト大統領夫人をして「おお、可愛想な我がナイヤガラよ!!」と言わせたスケール、幅四kmは、ナイヤガラの四倍、高さ数十mから一二〇mまでさまざま、平均六〇〜六七mはナイヤガラの五〇mより高く、流量もナイヤガラの一・五倍、滝の音は周囲二〇kmに及んでいる、といわれている。

滝をみるには、滝に面して、たった一軒のホテル、ダスカタラス（瀑布群の意）に泊るとよい。だが、この高級ホテル（四つ星で一泊一万円位）に予約をとるのは至難のわざ。エイジェントを通して早くから予約を入れても、なかなかとれない。

'81年冬に訪れたときは、いきなりフロントに出むいてキャンセル待ちに成功したが、'87年夏は、滝からバスで二十分ほど奥のイグアスの町に泊らざるを得なかった。

朱色と白のツートンカラー、宮殿のようなダスカタラスホテルは、周辺が森と滝、広いグリーンの上に、パイヤヤシの木々に囲まれて、聳えている。

滝の八〇％はアルゼンチン側にあるので、ブラジル側からみる景色がすばらしい。朝方と夕方では、滝の顔がまるで変わる。ダスカタラスから、ぶらぶら歩いて、ひとまわりするのに約一〜一・五時間かかる。最初のときは三日滞在し、毎日滝を観にでかけた。

滝を落ちる水は、茶褐色で、ナイヤガラのような清流ではない。周辺のテラローシャ土を含んだイグアス川が、滝となっているからだ。

テラローシャは、もともと玄武岩が風化した間帯土壌であり、赤紫色をしているが、水に混濁すると、茶褐色になる。清流よりも凄みを感じる。

パラナ川とイグアス川の合流点から二三km上流で、大地の亀裂に向って、水が落下し、最深部は馬蹄形になっている。滝の数は大小合わせ三百か所以上あって、水量も多い。

イグアス滝周辺の照葉樹林や、草花、トカゲやヘビのは虫類もいて、動植物に興味がある人々には楽しいところだ。

ダスカタラスホテルには、大きなプールがあり、ほんの数組のカップルが泳いだり、甲羅干しをしている程度、閑散としてのどこである。

このホテルは二百室はあるといわれるが、ほとんどがツインルームで、シングルはない。

ホテルのボーイがヤミの通貨交換をやってくれる。いわゆるブラックマーケットだ。

正規で交換すれば一ドル、一八四円、ホテルのフロントだと二〇〇

円、ホテルのボーイにたのめば二四〇円（二円＝〇・七七クルゼイロ）、といった具合だ。これは円に換算したので、ドルを出せば、その値分のクルゼイロをくれる、という意味である。

南米は、どこにでもブラックマーケットがある。隠れてコソコソやっているかと思えば、そうではない。オープン・マーケットのように、白昼、堂々と、道路でも、ホテルでも、代理店でもやっている。

警察や軍隊が通っても、みてみないふり。地下経済がすっかり根づいている感じだ。

イグアスの町からは、パラナ川一つ超えると、パラグアイである。

パラナ川沿いのパラグアイの町に向けて午後九時ナイト・ツアーがあり、ブラジル側から免税店での買い物や、ルーレットやスロットマシンなどギャンブルに出かける人々で賑う。

ここでは、ブラジルの通貨も使用できるし、ドルでの買い物物の自由。空港のデューティーフリーで、免税品が購入できるのと同じだ。

免税店で売られているものは、酒、宝石、時計、化粧品、電化製品などで数百軒が並ぶ一大ショッピングゾーンを形成している。

川一本で、国境を行ききするバスに、税関職員も見当らない。これは、かなり自由な往来ができる感じだ。

免税品のほか、パラグアイでとれる牛皮を使った、いわば靴、カバン、バック、コートなどの皮革製品が多いが、どれも品質が悪く、価格も安い。

カジノは、どこも満員、騒音の中で、真剣な眼差しでゲームに組んでいる人：人：人。

遊びとは思えぬ、金にとりつかれた顔がそこにある。

南緯二五度、真冬の八月とはいえ、熱帯の暑さだ。この緯度は、日本でいえば、沖縄石垣島のあたりだが、冬の温度がかなり違う感じ。

内陸と海岸の差か。

リオデジャネイロから南西に一、二〇〇km、ブラジル、アルゼンチ

ン、パラグアイの国境付近は亜熱帯性気候を反映して、照葉樹が多く、この樹林一帯には、極彩色の蝶が沢山飛んでいる。冬季より、夏季の方が、イグアス滝の水量が多いように感じられたが、豪快さは天下一品だ。イグアスからイタイプまでは、ほんの数キロ、パラナ川をさかのぼるだけだが、この付近の自然は、原生のまゝ残されているところが多い。だが、車でせいぜい二十〜三十分、外へ出れば、もう一帯は赤紫色のテラローシャを利用した、熱帯農業地帯が展開する。

(9) ブラジル農業の悩み!!

少々古い統計だがFAO'82年によると、ブラジルの農地は二億三、五二七万haで、国土面積の二八%（日本は四六八万haで、国土の一四%）と広大だ。

実際は、耕地が六、〇〇〇万ha強、樹園地が一、〇〇〇万ha強、そして放牧地が一億六、〇〇〇万haと高い比率を示しているが、一部の地域を除いて、粗放的な土地利用がなされている。

中部のセラード地帯や、北部のアマゾン地方は、未開発地域も多く、可耕地となるかどうかは、水利、灌漑施設や技術の提供いかに拘わっている。

国民経済における農牧業のシェアは一〇%程度で、減少気味に推移しているが、全経済活動人口の三〇%が、農牧業にかかわっており、さらに、農畜産物加工産業に吸収されている人口を加えれば、ブラジル農業の地位は極めて高い、といわざるを得ない。

農業経営上の特質をあげるならば、第一に五二〇万の農業経営者のうち、約半数が一〇ha未満の土地所有規模で、日本でいえば北海道の水準以下の零細農家だ。アルゼンチンのエスタンシャ（大農場）の崩壊は進んでいるものの、ブラジルのファゼンダ（大農場）は、なお健在で、地主と雇用農の関係での農業生産も広範囲に展開している。シチアンテ（自作農）比率も増加の傾向があるが、規模にはかなり凸凹

がある。

第二は、農作物の種類は非常に多いが、天候に左右され易く、豊凶の差が年度によって大きくあらわれる。早魃や霜害、虫害などに襲われる作物が多いのである。加えて、コーヒーや大豆のような輸出農産物も多く、国際市況に価格が振れて、安定的でない、という性格をもち合わせている。このところの農業生産の傾向としては、綿花、馬鈴薯、さとうきび、オレンジ、トマトが伸び、米、カカオ、とうもろこし、小麦、大豆など、跛行性はあるものの横バイだ。コーヒー、フェイジョン豆、たばこ葉、マンジョーカなどは減少気味に推移している。

第三は、全体としての生産性の伸び悩みや生産力の地域格差が大きいことである。地域格差でいえば、サンパウロ、パラナ、サンタカタリーナ州など南部が高く、セラード地帯カーチンガ、アマゾンなど北部および北東部の生産性が低い。水利や土壌、気候の関係、農業者の研究意欲や雇用の質とも関連してだ。

生産性の伸び悩みは、機械化による粗放化の傾向からでもあるが、略奪農業から、化学肥料の多投へと変りその結果、地力回復のための有機質肥料の不足や、輪作形態の未成熟性が発現している、と思われる。

主要農産物を作目別にみていくと、まずコーヒー。'89年のコーヒー生産は三、〇四〇万袋（六〇kg入り）で、世界の三三％のシェア、いぜん世界最大を記録しているものの、主要産地が、肥沃なテラローシヤ地帯であったパラナ州、サンパウロ両州からミナス・ゼライス州やゴヤス州のようなセラード地帯に移動している。これは、霜害が少ない地帯への移転ともいえる。

ブラジルにはコーヒー院になる行政庁があり、同院が、最低保証価格の決定や、輸出入、国内市場調整を行ってきた。最近、国内工場でインスタントコーヒーを製造し、輸出する傾向が顕著になってきているが、'83年の輸出量は一、七八二万袋（六〇kg）で二三億ドル

の外貨を稼いだ。

近年では、アフリカ諸国の台頭と、先進国の高級指向により、ブラジル産コーヒーは、伸びなやみ、あるいは減少傾向だ。

ブラジルでは、最高級品が、日本・ドイツへ、中級品がアメリカ合衆国、低級品はブラジルで消費する、といわれている。

大豆は、生産量が一五〇〇万tでアメリカ合衆国に次ぐ。マンジョーカ、とうもろこしに劣るが、作付面積はとうもろこしに次いでいるし、最近伸びている作目である。輸出商品としても、コーヒーに次いでいる。（輸出額二億ドル、輸出量の一〇％）産地は南部のリオ・グランデ・ド・スル州とパラナ州で、総生産量の八〇％と、地域特化が進んでいる。七〇年代の生産は、他作物からの転換、つまり、ローテーションの中に取り入れられて伸びたが、今後はミナス・ゼライス州やマツト・グロッソ州など、セラード地域で伸びることが予想され、南部から中部の特化地域の拡大となろう。

さとうきびは、もともとブラジルの東北地方で、黒人奴隷労働により、幅広くプランテーション農園で栽培されていた。むろん、ケイン・シュガーで食用であった。ところで、燃料用アルコール生産体制が強化されたのは、'75年スタートの「国家アルコール計画」による。その結果、'78年、'83年の間だけとってみても、六八％増の二、二億tと急増しているのだが、産地も、東北ブラジルから南東部および南部に移動してきている。

最大産地は、サンパウロ州、次いでパラナ州などテラローシヤ地帯での栽培が増えてきた。

生産量はブラジル砂糖・アルコール院（IAA）が需給バランスを保つよう統制しており、輸出も国際砂糖協定に従わなければならない。ブラジルの砂糖生産量はソ連、インドに次いで世界第三位、八五〇万t（'88年）で、八・三％に達している。輸出はそのうち二三〇万t（'87年）でキューバ、オーストラリア、フランスに次いでいる。

ブラジルのエネルギー消費構成のなかで、砂糖キビアルコールの占める比率は一〇・二%と決して多くないが、増加の傾向にある。

その他、小麦、とうもろこし、カカオなどに若干ふれておく。

小麦は、政府の、自給のための増産計画があるにも拘わらず、消費量六〇〇万t（'83年）のうち、七〇%が、カナダ、アメリカ合衆国からの輸入、七、三億ドルの支払いだ。主要産地は、リオ・グランデ・ド・スル州など南部に集中しているが、もう一つ生産量が増えない。とうもろこしも、南部及び南東部を主要産地としているが、年間二、五〇〇万t前後、アメリカ、中国に次いでいるが、国内牧畜用飼料向けで、輸出は少ない。また生産性も高くないのである。

カカオは、'76年から、「カカオ栽培拡大計画（PROCACAU）」の実施で、生産量も増え、質的向上にも成功した。生産量の三五万tは、アフリカ、コートジボアールに次いで多いが、生産高の九〇%は、中部ブラジルのバイア州で、輸出は一五万t（二、八億ドル）、国内産の四三%と、重要な外貨獲得農産物だ。

畜産業は、農業生産総額の約四〇%に達する重要部門であるが、中心は、乳・肉牛の一、二億頭（人口一人当り一頭弱）、豚三、二〇〇万頭、羊一、九〇〇万頭、鶏四、五億羽、技肉生産では牛肉二四〇万t、豚肉六二万t、鶏肉一一九万t、輸出量も多くない。

ブラジルの肉牛生産は、ネローレなど乳・肉兼用種があること、育成、肥育の段階が、いわゆる草飼料（グラス・フェッド）で、赤肉中心の低脂肪肉であること、に特質がある。日本や北米では、濃厚飼料給餌（グレン・フェッド）の飼育方式が定着しており、消費需要の面からみると、やゝ低質肉で、北半球の消費市場では、ミンチ肉（挽き肉）用などに使われ、低価格であり、ステーキ肉などに向かない。

ブラジルは人口、一、四億人に対し、乳用、肉用含めた牛の飼育頭数が一、二億頭、ほぼ一人一頭の割合だ、ちなみに、アルゼンチンは人口三、〇〇〇万人に五、一〇〇万頭の牛、これは一人当り一、七頭、

それに比べ、日本は、一、二億人に対し乳用、肉用合わせて四五〇万頭、一頭を二十五分で食べ合うことになっている。

こんな訳だから、牛肉の需要にも、価格にも、日本とブラジルでは大きな違いがでてくる。

ブラジルアで面白い話を聞いた。日系人のM氏は牧場を経営しているが、放牧地が広大で放牧牛の見回りは、ヘリコプターを使っている。牛は群をなす傾向があり、じかに現地に卦いてみると、他人所有の牛が、群にまぎれこんでいる場合があり、もうその牛は自己有牛として取扱う。同様に、他人の牛群にまぎれこんだ牛は、最早、自己有牛ではないのだから同じこと。頭数も数千頭、正確に何頭飼っているかは、自分でもわからない」と。

牧区があるわけではない、土地所有も図面上は、はっきりしていても、現実には境界があるわけではない。ミナス・ゼライス州やマツト・グロッソ州のセラード地域は、M氏の言うような土地柄なのである。

ブラジル農業は、途上国のそれではない。先進国に近い、中進国（NIES）の性格だと思われる。

機械化、水利化、施設化なども一定程度進んできている。だが、コヒーや綿花労働にみられるように手作業に依存する部分も大きい。低賃金労働力が得易いことにもよるが、労働運動が軍政から民政への移行と結びついて激しさを増し、労働者の労働条件が向上しているだけに、今後も、こうした状況が長続きするとは限らないのである。最低賃金制、労働諸条件の向上は、否応なしに、メカナイゼイションの方向を辿ることとなるように思われる。

(10) テイク・オフする工業

ブラジルは、鉱産資源の国であるが、工業化は遅れていて、原料を素材のまま輸出する、低開発国型パターンで特色づけられる、といわれてきた。

一般に五大鉱産物で、鉱業生産の八〇％以上を占めるといわれるが、五、八〇〇万t（世界の一一％）の鉄鉱石が、目立つ程度で、石油、石灰、石灰石、マンガン鉱は、世界レベルでみて大きなものではない。鉄鉱石は、可採埋蔵量が四三〇億t、これはソ連についており、その大部分は、ミナスゼライス州の、通称「鉄の三角地帯」に集中している。空からペロホリゾンテ周辺の土地を眺めると、テラローシャ地帯と見誤るほどの赤土（赤鉄鉱山）が、広大に開けている。

’67年に発見された、パラ州のカラジャス鉱山も、埋蔵量一八〇億tといわれ、外資導入によってリオ・セド社が開発、’85年以後は年間一五〇〇万t規模でスタートした。鉄鉱石の開発、貿易を担うリオ・セド公社（C B R D）は’82年、鉄鉱石輸出一八億ドルと、世界最大の鉄鉱石輸出会社であり、アルミ、チタン分野にも進出している。

製造業については、六十年代から外資を導入、国家の保護・育成策で順調に工業化がはかられ、耐久消費財の輸入代替がはかれるようになってきた。これは七〇年にほぼ完了、’70年代からは、資本財、鉄鉱、石油化学の分野で輸入代替が進み、八〇年代に入ると、工作機械、時計、カメラ、VTRのKDが行われるようになって、一段と工業化が進行した。

素材産業については、サントスなど臨海地域で、機械、消費財については、大都市域で工業ベースが整ってきている。

先端技術産業部門では、戦車、軍艦などの兵器産業が躍進し、第三世界の輸出量ではトップにあるほか、航空機、コンピュータ、重電、プラントが伸びてきている。

特徴的部門は、まず自動車。ブラジル国内にいて、日本の車に出合うことは少ない。欧米では、ノルドカップのような島嶼の最果ての地ですら日本車が走っている。では、どこの車が走っているのか。フォルクスワーゲン、GM、フォードが圧倒的だ。事実、’83年の生産台数をみても全体で九十万台、うち七八％をこの三社が占めている。次い

で、フィアット、M・ベンツなど九つの外資系企業が、現地ノックダウンを行っている。サンパウロからサントスに向う自動車道路沿線に、とくにこうした工場群が目立つ。九〇万台は、日本の一、二七〇万台に比べると、わずか七％ほどであり多くはないが、ブラジルで買う車の価格は、日本と比べ格段に高い。バス、トラックは生産台数の一四％ほどで、乗用車が七七万台と圧倒する。

’56年、クビチェック政権は、自動車工業計画の一環として外資導入による現地組立を奨励した。その結果、’66～’74年には九三万台の平均生産台数を記録したが、原油の海外依存度の高いブラジルでは、二度にわたるオイルショックで、対外債務がこげつき、自動車産業にもかげりが出たのである。

しかし、政府は、ガソリン代替のためのアルコール自動車生産と、アルコール製造のためのさとうきび栽培を支援し、その後はアルコール自動車で息を吹きかえた。

’83年現在での、完成車メーカーは一五社と増え、シェアは一位のフォルクスワーゲン（三八％）二位GM（二三％）三位フォード（一九％）、四位フィアット（二六％）、五位M・ベンツ（二・五％）である。日本車が現地組立できない背景は、前述したが、第一に、政府借款ですら国によって踏み倒される事情だから、安心して投資ができない。第二に、日本車が入ってくると、価格の低下による市場競争が激しくなり、メーカーにとってメリットがない、などがあるといわれているのだが、真意のほどはよくわからない。

製鉄部門はどうか。

一九五八年、ブラジルのイパチンカに設立されたウジミナス製鉄所は、出資金構成、日伯が五・五の比率、企業海外進出で戦後最大規模といわれた。日本側の株主は、当時の八幡、富士、日本鋼管など鉄鉱七社と、日立、東芝、三菱など機械関係業者七社で、ミナス・ゼライス州産鉄鉱石を活用する内陸製鉄所として生れた。’65年には年間粗鋼

生産量が五〇万ト規模の、鋼板専用の銑・鋼一貫工場であったが、同年の日伯出資比率は二・八となり、今日では日本側の出資比率は一〇%以下に落ちこんでいる。

このウジミナスに、CSN、コジッパの三大製鉄所を中心に、ブラジルの粗鋼生産は、七〇年五四〇万ト、八〇年、一五〇〇万ト、八四年一五〇〇万トとなった。

さらに八四年にはツバロン(三〇〇万ト)、八五年にアソミナス(二〇〇万ト)などが設立され、二七〇〇万体制がほぼ完成したことになる。日本の一億トンからみれば、そう大きいものでないが、国内需要を満し、輸出国への道を歩みはじめている。

石油化学も、'67年、石油公社(PETROBRAS)から、石油化学部門を独立させ、外資導入を求めて石油化学公社(RETROQUISA)によるコンビナート等の設立にのり出した。

工場立地は、サンパウロ州のクバトン(エチレン三六万トほか)、カマサリ石油化学コンビナート(バイア州で三九万トのエチレン)が出来、七五年にはリオ・グランデ・ド・スル州に四二万トの石油化学センターを設立した。

その結果、八三年の石化製品は、エチレン一一六万ト、プロピレン五九万ト、ベンゼン四四万ト、ポリエスチレン四九万ト、PVC二九万トなどの生産能力をもつようになり、中進国から先進国へのティク・オフを可能にできている。

造船業などは、鉄鋼、自動車とともに、クビチェック政権時代から、政策的テコで、伯国の目玉産業にしようと努力してきた部門だけあって、七八年の建造量は一二四万トに達した。

八九年の新造船受注量は三二万トと、多くはないが、穀物用船の比率が高く、タンカーなどは少ない。

主要造船所一二社のうち、外資系はイシプラス(日本)とVerone(オランダ)の二社で、一五万ト以上の大型船の建造能力をもっている。

電気、電子、通信機器も、先進国へのティク・オフのための重要部門で跛行性をもちながらも、伸びている。電子部品、テレビ・音響製品、送発電設備機器など、重・弱電部門で、南米最大の成長を遂げているものの、公共支出の引き締めや、不況による一般消費者の買い控えなど、年度によって、市場需給に変化が生じ、ジクザクな生産状況が続いている。

こうした状況をみると、ブラジル工業は、「奇蹟の経済発展」の言葉に必要な成長があるものの、とめどなく続くインフレ、軍政と民政の不安定なさまざまな政策転換、重くのしかかる地下経済の動きなどで、安定した状況にあるとはいくにくい。

(1) 結びに変えて

始生代、原生代のゴナワナ大陸が、かなりの部分を占めるブラジルは、鉱産資源の宝庫である。だが、その採掘は、ほとんどが国営消費財の生産も、ほぼ一〇〇%が国産化していて、中南米最大の工業国(輸出の七一%が工業製品)であり、軍事産業と軍事力をもつ国である。農業は、輸出戦略産業で、穀物生産段階での機械化も進んできているし、規模も大きい。

こうした材料をみていると、先進国の装いが感じられる。だが、先進国のイメージはなかなか出てこない。

先進国たる基準は、工業生産力や就業構成、経済の安定、国民の平均的消費能力の高さ、文盲率の低さ、就業率の高さなどが規定する。

今のブラジルは、一か月のインフレ率が一五〇〜一六〇%、銀行の預金利子が一三〜一七%であるのに、貸出利子は二七〜四〇%と高く、バンクローンを利用して返済不能になる人々が多い。中、上流階級でも、一挙に下層に転落することも珍らしくないのだ。そのためか、今のブラジルの階層構造は、ピラミット型から、底辺の厚く広い、そのうえに柱をたてたような凸形型に変化してきているといわれる。

税金も、種類が多く、税額も高い。電化製品は輸入税八八%、流通税二五%、自動車は輸入税五〇%、流通税一八%といった具合だから、小売店はこれに経費と利益を加算して、売価は、仕入値の三倍程度になっってしまう。こうした税金も、将来は、減ずるか、廃止の方向だ、とはいわれているものの、とてつもない物品税だ。

銀行は、国民から預金を集めて、政府、国家に貸付け、その利子で経営を行っているとも聞く。

国は、国民から税金を完納させるため、税金の三〇%を費いやす熱の入れようだ。

だが、汚職にまみれたパラ州出身の前大統領サルネイを批判し、クリーンを政治色調とした、現大統領コーロも、蓋をあけてみれば女性蔵相ゼリアが五〇億ドルと二〇億ドルと二回にわたって不正を働いて失脚、妻エレベアがLBA（子供の福祉団体）で汚職をしたとして問題になり、その弟が、アラゴアス州の某市長に金銭問題で発砲するなど、大統領周辺から腐敗していて、それが国民の末端まで汚染している感じだ。

一方で、経済活動は冷えこんで不安定、失業者が増大し、農業も不振で、離農離村する人々が増えている。

日系人の入植地として知られているバイア州バレイラスでは、六十戸の農家があつたが、現在は二、三戸のみ、ほぼ崩壊団地となった。

その背景となつたのは、農産物の下落などで、安い国等の融資が受けられなかったことである。サンゴタルドやパラカツなどのセラード地帯は、こうした融資で救出したが、バレイラスは、該当しなかったのだ。

ブラジル日系人達にとって、ビザが比較的簡単に取得できて、海外出稼ぎが容易なのは日本。一九九一年八月の新聞報道では、日本へのブラジルからの出稼者は、年令層に関係なく増えており、総勢十五万

人、うち十二万人は日系人だといっている。

日本から、第二次大戦後、ブラジルに移住した移民数が八、九万人と推定されているから、この数を上まわる日系人が逆流していることになる。

日本ばかりではない。アメリカには年間六十万人のブラジル人が出稼ぎにでかけ、フロリダ州マイアミだけでも、二十二万人が働いていると推定されているが、この中にも日系人が少なからず含まれている。

日本に出稼中の日系人、いわば三K仕事に従事する。汚い、危険、きつい業務で、日本人が、避けてやりたがらない部門で働く。

車の組立ラインや、建設、建築業の末端作業を行うのだ。

その結果、得られる報酬は、二か年間で四万、五万ドル（五四〇万円、六七〇万円）であり、これをブラジルに持ち帰れば、田舎で、中流程度の家の購入が可能だ。

だが、彼らがブラジルで、家や新車が購入できたとしても、日本で働いて得られる報酬に匹敵するだけの仕事がないし、生活が成りたらない。

そこで、日系人であることを背景としての自由なビザを利用し、日本への永住を決意している人々も少なくない。まさに、逆移民の状況すら生れているのである。

ブラジル経済は、ここ数年急速に冷えこみ悪化している。ほんの数年前日系人で、日本の土を踏んだ若者達が、日本は経済も技術も進んでいて学ぶところは多いが、住むところではない、と「楽天地ブラジル」を賞讃していたものである。

しかし、「白人のカポクロ化」が進んでいるなかで、そんな気楽な気分になれない現実があるように思える。カポクロは、田舎者を意味する土着人を軽視していたいい方だが、この背景には、白人移民者も、最底辺の労働者に落ちていく、そうした時代を象徴する言葉である。

経済状況が不安定になると、犯罪も凶悪になり、件数も増加する。

かつて、「現金を持参していると、盗られた後、殺されるアメリカ」、「現金をホテルに預けるとなくなるので、身につけておくのが安全なブラジル」、などといわれたことがあった。

ブラジルには、物盗りは多いが殺人が少ない、ことを形容する話である。

最近のブラジルには、誘拐産業が、公然とうごめいている。ブラジル人のほかに、コロンビア人やペルー人が加わり、警察や弁護士も加わってシンジケートをつくり、誘拐による金品の収奪を商売としている。満されなければ殺人が待っている。

ピストルを保持するには登録制になっているが、購入しようと思えば、どこにでも売っている。

犯罪内容の凶悪性は、アメリカ合衆国のそれに近づいている、といえるかもしれない。

ブラジルをみる視角は、その人の見た範囲や、学んだ内容、調査した土地柄によって随分違ってくる。

ハーマン・カーンは、「ブラジルはビッグカンントリーだが、グレートカンントリーではない」と述べ、ブラジルの知識人から失笑を買ったり、アービング・ホロウィツクは「アメリカ人は四つのバイアスでブラジルを見ている」といって、そのバイアスの中味を説明している。簡単にいえば、アマゾンを見て、それがブラジル全土の風土と説明し、アメリカ的政治経済の枠組を基準として、ブラジルの政治機構、経済システムを評価し、サンバ・ダンシング・ピープルがブラジル人と規定する。

アメリカ人観光客を案内するエイジェントもジャングルと、コパカバーナとイグアスがブラジルだと宣伝する。

この「偏見、偏向」は、悪気があって語られているのではなく、強烈なイメージに残ったものを、その土地柄の代表としただけであって、あえてねじまげて伝達しようとする意図が働いているのではない。

但し、土地の住民は、そんなバイアスで、ブラジルを理解してもらっては困る、と思うのも無理のないところ。

日系ブラジル人が、はじめてみた日本は、どんな印象となっているか。若干の人々の声をあげると次のようになる。

①、日本には、日本人しか住んでいないの。②、どうして街頭の靴磨きに新聞が読めるの。③、男の人は、黒っぽい背広にネクタイ姿ばかり、女の人は、個性のある、自分にあった身なりができていない。④、日本人は、白い肌の女性が好まれるの。⑤、知らない人に不親切。⑥、物資が豊かだといっても、菓子やチョコレートに包装が過剰。⑦、トイレが水洗になっている家がある、等々だ。

日本人にとって当り前のことでも、生活習慣が違い、風土が異なれば、発想や感覚は大きくずれてくる。

「日本は単民族国家で等質性が強すぎて、個性が失われている、服装でも、食べ物でも、風俗、習慣でもそうだ」とブラジル人はみているようだ。

チャールス・ベグレーは「ブラジル文化は、異質性と統一性のうえに成りたつ。異質性は多様性に通じ、等質性は、統一性に連なつて、そこには一応の対応関係がある。単なる対立の関係ではなく、きわめてインテグレートされた全体をなしている」という。

そういえば、貧富の差が極わだつていている二重、二極構造があり、オモテ経済とウラ経済が拮抗しながら一定のバランスがあり、多種の混血化が平然と進んでいる。

文盲率算定の基準ははっきりしていないが、文字を書けるを自分の氏名が書けると解釈すれば二〇％、新聞が読めるかとなれば半分は文盲、それでもポルトガル語普及率は九〇％以上と説明している。

なんとも奇妙な大国だが、インフレ率年間一、八〇〇〜二、〇〇〇％でも、経済が崩壊しないで動いていることだ。ラテン地域とはいっても、隣国のアルゼンチンは経済の「ドラリザソン」制度、つまり母

国通貨アウストラルもドル表示ができる方式に換え、インフレ率を月一％台に押えている。そのため、国家公務員の大量解雇や国営企業の民営化をすすめ、輸入品関税もなくしている。ブラジルも近い将来アルゼンチン方式の制度導入にいくのだろうか。

ブラジルと日本との違いと、共通性の本当のところはなんなのだと今、私は自問自答している。

(一九九〇年度、短期海外研修報告)